マラッカ海峡リアウ諸島州における

マングローブ森林生態系の地域利用とグローバル化

―インドネシアＦＳの経験を踏まえて―

平成２０年入学
インドネシアフィールドスクール
調査国：インドネシア共和国
原田ゆかり

キーワード：マングローブ・相互関係・持続的利用・資源管理・炭

自身の研究テーマについて

近年急速に進んでいる熱帯雨林の伐採問題は，マングローブ森林生態系においても例外でない。グローバル化の影響による養魚池の増加などによって，インドネシアでは，2000 年にはマングローブ森林生態系の減少率は 1980 年に比べて 31％となった。そこで本研究では，グローバル化の影響を受けつつも今なお豊かなマングローブ森林生態系が残っているインドネシア共和国リアウ諸島を，マングローブ森林生態系と人間の共存が成立している地域と仮定し，自然と人間の共存における一つの例を提示することを目的とする。

２００９年８月１３日～１０月１５日，インドネシア共和国リアウ諸島州バタム島において，聞き取りによるマングローブ利用の実態・調査村の概要と，毎木調査による森林構造調査を行った。

調査の結果，現在もバタム島には２００を超える数の炭窯が存在しており，いずれもマングローブ炭を製造している。「炭作りなどのマングローブ林の利用は，伝統的な文化だ。だから私達は法律を恐れていない」という声が印象的であった。バタム島は工業都市であるが，マングローブ林の景観を観光資源として利用している地方や，マングローブ林の水産資源や森林資源を，生業として利用している人々が今も多くいる。バタム島を支えてきた人々の生活を守るためにも，今後どのようにマングローブ森林生態系の保護を行っていくべきかを考える必要が示唆された。

写真１　炭焼きのためにマングローブ林を伐る

フィールドワークから得られた知見について

聞いた事と見た事を混合しない。最後の総括会で島上さんがおっしゃった言葉である。今回のＦＳは色々な場面において，本当にこの言葉の通りであったと思う。私は昨年度からインドネシアで調査を行っており，「私はインドネシアビギナーではない！」という意識がどこかにあったようである。「すでにある程度知っているはず」のインドネシアから，こんなにも驚かされるとは思ってもみなかった。

今回のＦＳは体験する・見る・感じる事に主点が置かれており，講義はそれをサポートするために行われた。先生達からの指示は唯一「面白いと思った事，不思議に思った事があったらメモしておくように」。何も考えず，ただただ村人の普段の生活を体験する。初めてだった。普段は目にしても自身の研究に関係ないからと記録まではしない様なこと，自分の中で「そうか」で片づけずに「あ，面白い！」と思う事が出来た。例えば竹で作られた壁には小さな穴が存在し，そのお陰で風呂場が明るくて助かるといった事。そんな自身の体験から得た発見を，皆で共有する事が出来たのも，今回のＦＳの有意義な点であったと思う。

実際に体験してみると，聞いたことや考えていた事と全く違う事実や発見があるかもしれない。そして自分の見たもの，体験したものに，自分の知識の中から勝手に答えを見つけて納得して終わりにしないこと。実務家として地域と関わる際には，忘れてはいけないスタンスの一つだと感じた。

写真２・３　竹を編んで作られた家屋の壁（左：家屋の入口付近・右：物置小屋）
場所と用途によって色柄を変えてあるのが印象的。風や光を通す。

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

タマンジャヤ村は国立公園に隣接しており，エコツーリズムが収入源の一つとなっている。村民によって協同組合が組織されており，ツアーガイドなどの機会が平等に行きわたるように工夫され，伝統工芸品等の流通も組合によって維持されている。地元の生活を守りながらの自然保護・地域発展。これが，人間も含めた地域の自然環境を守るということであると思う。そのミクロな取り組みの例を，今回タマンジャヤ村で見る事が出来た。

私の調査地域は工業化促進の最先端の島であり，自然は減少していく一方である。インドネシアにはマングローブ林の伐採を禁じる法律が存在するが，それを形式通りに施行してしまうと，多くの人々が仕事を失う。違法伐採を取り締まる事だけが自然保護ではない，開発による伐採に反対するだけが自然

保護ではない。自然・国・地域住民，それぞれの利益・不利益を踏まえた上での，自然と人間の共存関係について今後考えていこうと思う。

写真４　手作業で毎日伝統的菓子を作る女性。
収入を得て夫を助けたい。